



## 「工大時代の思い出と、 その後の私の歩み」

株式会社 荒谷建設コンサルタント  
代表取締役社長 荒谷 壽一  
広島工業大学 土木工学科 昭和47年卒

### 社長業を継ぐため、工大に編入。

大正5年に創業。荒谷建設コンサルタントは、建設関連の総合コンサルティング会社として地域密着型の事業に取り組み、およそ90年に及ぶ歴史を刻んでいます。私は創業社長である父親から代を譲られ、会社を継ぐことになったのは昭和50年のことでした。

当時、私は日本大学の経済学部を卒業したばかりで、広島に戻ってはきたものの、いきなり社長業に専念するには問題がありました。私は根っからの文系でしたから、土木の専門用語がほとんど分からなかったのです。そのため、この分野を基礎から勉強する必要があります。広島工大で学ぶことを決意しました。専攻は土木工学科でした。「将来は会社を大きくして、広島工大の学生をたくさん採用してくれよ」と、面接の場で冗談交じりに言われた、当時工学部長の故櫻井季男先生の笑顔がいまもはっきりと思い出されます。

### 卒業研究は道路設計の仕事。

広島工大の歴史の中で、学士入学したのは、おそらく私が最初だったと思います。工大での3年間は、理系の勉強に追われる毎日で苦労もしましたが、それが私にとって生涯のうちで一番真剣に勉強した時だったように思います。同期は3歳年下でしたが、みんなおおらかで、気持ちのいい仲間ばかりでした。ゼミは平成11年に退職された鈴木健夫先生の研究室に所属。卒業研究では、道路設計に取り組みました。これは五日市町からゼミに依頼された仕事でもあり、仲間と夜を徹してディスカッションしながら、一生懸命、設計図を書いたものです。

土木工学の学生は将来の目標がはっきりしている人が多く、まとまりや行動力がありました。その結果、卒業研究は鈴木先生にお褒めの言葉をいただいたほどの出来映えでした。

### 東京で研修。広島で経理も学ぶ。

工大を卒業後、ふたたび東京へ。「アジア航測」という会社で3年間修行しました。ここでは宅地造成のための測量から設計まで、土木の仕事をみっちり実践

しました。実をいえば、もう2年間ほどここに残りたかったのですが、昭和50年に広島に戻り、いよいよ本当に社長業を継ぐことになりました。その時私は29歳でした。

その頃は、オイルショックの影響で公共事業がどんどん減っていた時期でもあり、その上、社内では財務や経理の管理がまったくなされていないことが大きな問題でした。技術のことばかりに専念していたため、この分野がおろそかになっていたのです。そこで、私は経理・会計の専門学校に通い、経営分析をしっかりと学んで、会社を立て直すための努力に取り組みました。



社長就任直後

### 経営の立て直しに取り組む。

その道は決して平坦なものではありませんでした。社員の信頼を得るには、あまりにも若かったのでしょうか。考えの摩擦もありました。辞めていった社員も幾人かいました。その頃は、私にとって最も辛い時期でしたが、武者修行した「アジア航測」から人材を招いたり、粘り強く取り組んだりすることで3～4年目あたりから、利益がぐっつきりと表れるようになってきました。会社としてその時々目標を明確に打ち出し、運営していくことで社員からの信頼も次第に大きくなってきました。

「社員みんなが働き甲斐があり、中四国でトップクラスの給料を出せる会社になりたい」。それが、当時の私の目標でした。

### いち早く環境共生をスローガンに。

いまでこそ、「環境への優しさ」をスローガンのひとつに掲げる企業はたくさんありますが、わが社では昭和50年代の始め頃から「人間と自然を考える」を社是とし、業務を広げてきました。事業も、地質調査をはじめ、測量分野や、道路・トンネル・橋梁などの社会基盤の設計、施工管理、さらには河川・砂防、都市計画、公園・緑地開発など、そのフィールドは多岐に渡ります。60周年、70周年、80周年などの節目を迎えながら、会社は順調に伸びてきました。



造成地盤調査(広島広域公園)



商工センターペDESTリアンデッキ(広島市) 網箱桁橋

しかし、泥沼ともいえる現在の日本経済の中で、いま私たちの業界はかつてないほどの厳しい局面に立たされています。公共事業費がますます削られていく今後は、これまでの常識や仕事の手法が通用しなくなる。私はスクラップ&ビルドの時代は終わり、建造物の維持やメンテナンスの部門が大きなウエートを占めてくると考えています。

### 新しい挑戦へ。

維持管理・メンテナンス分野に加えて、環境アセスメント、防災、GIS(地理情報システム)、耐震設計などの分野を新しい切り口としてプランを提案していく。しかし、それはただ与えられた仕事をこなすだけの取り組みでは実現不可能です。その意味で社員教育もとても重要になってくると考えています。



周辺景観との調和を考慮し公園の「顔」として建築設計された作木ふれあい公園「スカイドーム」



GISによる土石流危険渓流システム



GISによる道路管理システム

現在、わが社には広島工大のOBは38人いますが、全員が実に優秀です。土木系資格の最高峰であり、最も難関とされる技術士の国家資格をもつOBが6人もおり、私も誇らしく思っています。

また2年前から、私は工大の外部役員である評議委員を務めさせていただいていますので、さらに民間企業と一緒に研究できることはないか、と考えています。

大学と企業がお互いのノウハウを出し合いながら、2人3脚で取り組む。これからは企業はもちろん、大学も生き残りが難しい時代。産官学の連携を強化することでも、新しい可能性を見いだしていきたいですね。